

浄土

monthly JODO

2020
October

10

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



高さ110mm、口径95mm、
胴径160mm、高台径
70mm。釉ハゲやニュー
が見られるがとくに大
きな傷みはない



この歳になると、手元にはろくな骨董品はないものの、これ以上骨董市や古道具屋でなにか買つて、身の回りに物を増やしてどうするのだろうという気持ちが強くなってくる。私が死ねばゴミである。

本当に欲しいもの、身近に置いて置きたい物はなんでしょうと、ふと考える。まず李朝白磁の小さな壺、同じく朝鮮の民画（鵲虎図）、江戸期の大津絵（鬼の寒念仏）、北魏あたりの小金銅仏といったところだが、いずれも高価で、私のような貧乏人が買えるものではない。博物館や美術館で観るだけである。こういった古美術品ではなく、たとえば北海道の鉄道で使われた赤錆だらけの犬釘なども欲しい。

そんなことを考えている自分の物欲の強さに思わず

笑い出して、ツレアイから不審げに見られたりする。

写真の壺は骨董市で買ったものである。骨董屋の親父は「これは李朝末期のものね、日本で言うところの明治の初めあたり」とずいぶん口が軽い。こういう口の軽さは要注意である。しかし、こちらにたいした知識と鑑識眼があるわけではない。そろばん型の胴の張りや好ましいし、絵付の筆づかいもどこか素人風で魅力がある。親父に値を訊くと四千円とのこと。もう少し安くならないかと交渉して、三千五百円に落ち着く。このくらいだったら、後世の写しだとしてもかまわない。

李氏朝鮮は一九二二年から一九一〇年（一八九七年に国号は大韓帝国となる）まで続いた王朝で、朝鮮半島における最後の統一国家である。

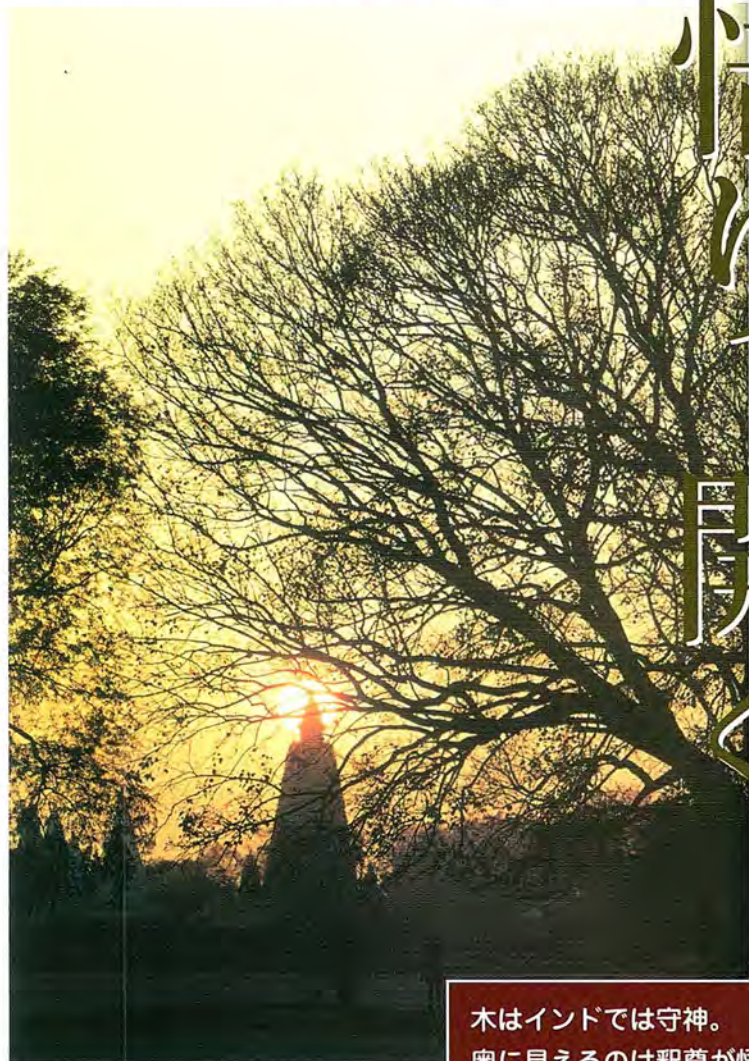
一九一〇年は明治四三年であるから、親父が言うように李朝末期のものなのかもしれないが、おそらく大正李朝と呼ばれる、大正期から昭和の初めにかけて朝鮮半島で作られた李朝風の焼き物だろう。大正李朝の白磁は近代的な軽やかさを特徴とするという説もある。たしかにこの白磁の壺も軽やかな感じではある。硬く焼き締められた乳白色の肌は、爪で弾くと金属的な音を返してくる。短く剪った紫陽花や野の花を放り込んでおくと、なかなかいい風情である。

インド渡航歴40回超！

佐藤良純の No.5

インド・釈尊あれこれ紀行

悟りを開く



木はインドでは守神。
奥に見えるのは釈尊が悟り
を開いたブッダガヤの大塔

王家の子供として何ひとつ不自由なことの無い毎日を送っていた釈尊がなぜ出家の道を選んだのか、経典で一般的に知られているのが四門出遊^{しよもんしゆゆ}。すなわち東西南北の門外に、老人、病人、死者、そして出家者を見て、世のほかなさを知り出家したというものだ。が、パリー語経典にはこの話が無いので後に付加されたのであろう。さらにこの物語は、ヒンドゥー教にも同時代のジャイナ教の伝承にもないので仏教特有のものである。これとも一つ、王子時代の農耕祭で父である王と森へ一緒に行った時、たまたま小さい虫が大きい虫に食べられ、その大きい虫が鳥に食べられるところを見たという。まだ少年時代の釈尊だが、弱い物が食べられる道理に気づかされたのが出家の理由になっているとも言われる。

出家ののちブッダは他の修行者と同じように苦行に励んだ。苦行の原語は「タパス」で、タパスは熱を意味し、熱がエネルギーになると考えられていたことからきている。ブッダが苦行を行ったのはブッダガヤの郊外にあるブラグドリー（現ドンゲシュリ）の洞窟。窟の上に登ってみると遠くにはブッダガヤの町が見える。その手前に数個のストーパが見えるが、ガヤ空港に着陸する直前、真下に見えるストーパである。

しかし、ブッダは断食や不眠は悟りのためには役に立たないとしてやめてしまった。断食をやめたブッダは川で身を清め、村の娘スジャータの供養した牛乳入りのお粥をとって元気を回復する。現代でもお腹の具合が悪い時いただく、ケチュリと同じものである。

スジャータはかねて男の子が欲しく、樹神に願いをかけていたので、樹の下で瞑想にふけていたブッダを樹神と思い供養したものだと思われる。スジャータはセーナ村に住んでいたが、その住んでいたところに記念のストーパが建てられ現存している。

ブッダの時代、六師外道と言われるヒンドゥー教以外の多くの修行者がいた。教え、修行方

ブッダが修行した洞窟へ入る
入り口は大きな石の左手奥



洞窟には釈尊の苦行像が祀られている

法が一番仏教に近かったのがジャイナ教で、開祖ジナの教えも活動範囲もほぼブッダと同じであった。ただし修行の方法はブッダより厳しく、最後は自殺を目標としていたらしい。ブッダが悟りを開いた後、ムチャリンド竜王が7日間昼夜ブッダを雨風から守つたという。竜、すなわち蛇は恐ろしいが守り神として頼りにされていた。インドでは、樹木と蛇（竜のこと）が守神として崇拝されている。先のスジャータが祈願したのが樹神であったのはこうしたことによる。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとうりょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「ブッタガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。



苦行した洞窟の上に登るとブッタガヤの町の方に伸びる尾根がある。およそ30年前にこの尾根を佐藤良純師は縦走している。現在は木が生え、景色は一変している



今も苦行に励む修行者がたくさんいる

写真で訪ねる インドと釈尊

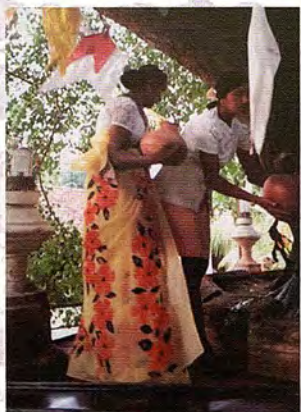
③ スジャータ

釈迦の苦行放棄のきっかけとなったスジャータの乳粥供養。スジャータの名前はブッダガヤにスジャータ村としてその名を残し、スジャータ供養ストーパも残っている。日本ではコーヒー用ミルクのコマーシャルでその名が広がった。

佐藤良純住職の光園寺には、住職が永年インドを訪れてきたからこそ手に入れられた貴重な釈迦にまつわる品々が数多く祀られている。写真はスジャータから乳粥を供養される様子を彫り出した仏伝像



スジャータは樹に宿る神へのお礼の祭祀中に釈尊と出会った（撮影協力 梅窓院広報部）



今も写真のような入れ物で乳粥がお供えされている



スジャータが住んでいたところに建っている記念のストーパ

浄土

2020/10月号 目次

連載 インド紀行⑤ 悟りを開く	佐藤良純	1
インド写真紀行③ スジャータ		4
特別企画 被災寺院の今—房総半島台風から一年—	郡嶋泰威	6
連載 寺々刻々④ 第二の廃仏毀釈に備える	鶴飼秀徳	14
ぶつぶつ放談 お寺に必要な IT (第1回)	今岡達雄ほか	18
微風吹動 琴の弦	名和清隆	22
連載小説 渡辺海旭⑩	前田和男	26
連載 江戸の川を歩く④⑩	森 清鑑	32
連載 マンガ さっちゃんハネッ	かまちよしろう	39
編集後記		40

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

◆特別企画◆

被災寺院の

令和元年

房総半島台風から一年。

いまだからわかる

天災に備えるべき

「もの」と「こと」

今

千葉県鋸南町●浄蓮寺副住職

郡嶋泰威

令和元年九月九日未明、房総半島を襲った台風15号（後に「令和元年房総半島台風」と命名）により、私の住む鋸南町、そして自房である浄蓮寺は甚大な被害を蒙りました。

町全体が文字通り「壊滅的被害」を被り、町中のいたる所に被災ごみが山のように積み上げられ、以前、東日本大震災後の瓦礫撤去のお手伝いに行った時に見たのと同じ光景がそこにありました。

電気の供給が途絶え、浄蓮寺周辺は被災後一週間停電しました。一方で、水道は、町の水道局職員の方たちの献身的な努力により、被災直後から供給が途切れることはありませんでした。又、ガスはプロパンガスだった為、被災直後から通常通り使用できました。

〈浄蓮寺の被災状況〉

浄蓮寺の被害も深刻なものとなりました。浄蓮寺には本堂、客殿、庫裏の三棟の建物があり、庫裏が住職夫妻の住居、客殿は一階が大広間で二階が副住職家族の住居となっていました。

最も被害が深刻だったのが本堂でした。銅板葺きの屋根、ほぼ全てが強風で吹き飛ばされ、正面のサッシ扉がうち抜かれ、側面のガラスも割れて、堂内に容赦なく雨風が入り込みメチャクチャな状態でした。

また、客殿も大きな被害を受けました。吹き飛ばされた本堂の屋根がぶつかっただけでなく、屋根が大きく破損し、天井も抜け落ちて空が見える状態で、ここでの生活を断念せざるを得ませんでした。雨が吹き込み漏れ放題となり、雨水が一階まで達して大広間の四十畳の畳はびしょ濡れになってしまいました。対して庫裏は、瓦がズレて多少の雨漏りはあったものの、他二棟と比べると被害は軽く、幸い被災直後から畳の上で生活できる状況にありました。お陰で副住職家族四人は、客殿の修復が終わるまでの間、庫裏の一室で生活することができました。

〈被災直後、片付け・応急処置作業〉

そんな中で、復旧作業が始まりました。とはい

え、家族だけの力ではできるといえば、細かいゴミを運び出す程度。大きな瓦礫の撤去や屋根のブルーシート掛け等の大掛かりな応急処置は、手が付けられない状況でした。しかし、誠に有り難いことに浄土宗青年会を始めとする宗内僧侶の皆さまや、一般ボランティアの方等、延べ二百人にのぼる多くの皆さまの絶大なご協力をいただいたお陰で、思いのほか早く瓦礫の撤去作業を終えることができました。

そして、全国各地の有縁の方より水や食料等、多くの支援物資をお寄せいただきました。被災直後に郵送して下さった方や、遠路を厭わず車一杯の支援物資を積んで駆け付けてくれた方もいました。さらには多くのお見舞い（義援金）を賜りました。直接のご支援を賜った方に限らず、千葉教務所宛に義援金をお寄せ下さった方や、宗門の「救援募金」の要請に応じてご協力をいただいた方も多くいらっしゃるかと存じます。宗内教師はじめ多くの皆さまの「同人和合海」のお心に重ねて深く御礼申し上げます。有り難うございました。



大きな被害を蒙った浄運寺。
左は本堂屋根、下は本堂後ろ
の浄運寺専用駐車場



〈客殿・庫裡修復作業〉

町全体の家屋が悉く被災した状況下で、地元の工務店は応急処置のために多忙を極めました。大きく破損した客殿の屋根にようやくブルーシートがかけられたのは被災から五日後のことでした。しかし、最も被害が大きかった本堂については「手が回らないから、他の業社に頼んで欲しい」との旨を伝えられ、縁を頼り某建設会社の本堂屋根の応急処置を依頼しました。

引き続き、三棟の被害状況の調査と、修復について話し合いが重ねられました。まずは、客殿を早急に修復して大広間を仮本堂として整えることになり、十一月初旬に着工。工事半ばの十一月二十八日には十夜法要を厳修し五十名弱の檀信徒が集い、共にお念仏をお称えしました。そして十二月半ば、無事客殿修復工事を完了することができました。

〈本堂修復断念 新本堂建立へ向けて〉

一方、本堂は当初修復の可能性も探り役員会で検討を重ねましたが、①修復の見積額が余りにも莫大だったこと②修復をしても現在の耐震基準を満たせず、自然災害に耐えうる保証が得られないこと③護持会で掛けていた保険金が想定程度おきたこと、等の理由から修復を断念。檀信徒からの勸募は行わず、保険金と護持会の積立金、宗から賜った義援金、浄蓮寺の預金等を原資に新本堂建立を目指すことになりました。

その後、早ければ翌、令和二年四月には被災した本堂の解体にとりかかる予定でしたが、その矢先に想定外の事態が起こりました。新型コロナウイルス感染拡大です。全てが一時滞り、空しく時を過ごしましたが、緊急事態宣言が解除され暫く経った六月十八日、ようやく解体作業を開始。作業は順調に進み、七月十三日、作業の全てを完了しました。

被災した本堂の解体工事と並行して、新本堂の

設計が本格的に始まりました。旧本堂建立から六十年が経過し、その間耐震基準も大きく改正され、様々な制約が発生しました。しかし、設計担当の方のご尽力により、法規上可能な範囲で、最大限利便性を保てるように難しい調整に取り組んでもらっています。今後さらに具体的な設計を進め、早ければ年明けの着工を目指しているところです。

〈今後の課題〉

浄土宗内外多くの皆さまのご助力によって、なんとか復興の端緒につくことができましたが、災害時の救援ボランティアには危険が伴います。ボランティアにご参加下さる方は、必ずボランティア保険に加入して下さい。

近年自然災害が頻発している現状にに応じて、令和二年度から「浄土宗災害ボランティア会員制度」がスタートしました。ボランティア保険の加入や事前研修等を予定しているとのこと。ボランティアにご参加をお考えの方は、この制度を是非ご利用いただきたいと思います。

被災直後の本堂内の様子。
下は東京教区での研修会



〈地元檀信徒とのかかわり〉

これまで浄蓮寺のことを中心に記してきましたが、併せて鋸南町の現状についてご報告させていただきます。

被災から一年以上が経過しましたが、未だに屋根がブルーシートで覆われている家が多くみられます。また、屋根の修理は終わっていても屋内の修理はまだまだ手付かずという家も少なくありません。一方、街のあちこちで修復を断念した家の取壊し作業が行われています。

鋸南町は、もともと少子高齢化が著しく高齢者だけの世帯が多かったのですが、台風被災以後、人口流出・世帯減少が一気に進みました。

お年寄り世帯で住まいが被災した方の中には、初めから修復をあきらめ、都心に住む子供家族のもとに身を寄せる方が少なからずいました。住んでいた家は次々と取り壊され、町のいたる所が「虫食状態」になっています。

結果的に被災当時の人口は約八千人、総世帯数

約三千でしたが、この一年で人口は約二百五十人、世帯数は約七十件、それぞれ減少しました。浄蓮寺の檀家さまも多くが被災し、今後、寺の維持運営に少なからず影響が及ぶであろうことが想像されます。ふるさとを離れる人が増えれば、これまでのような親密な寺檀の結びつきを維持することは難しくなると思われます。離れても心の拠り所となりえるように、今まで以上の情報発信が必要であろうと思います。

〈地域コミュニティの崩壊〉

建物の被災は、地域コミュニティの崩壊も招きました。地域のお年寄りが利用していた地元スーパーが甚大な被害を被り九月末で閉店。被災前このスーパーは、近隣のお年寄りたちが買い物をしてお互いに顔を合わせ世間話を楽しむ、憩いの場となっていました。しかし、そのスーパーが閉店してしまったことにより、日常の買い物がままならなくなっただけでなく、お年寄りが互いに顔を合わせ会話をする機会が著しく減ってしまったの

です。

地域コミュニティの崩壊は、浄蓮寺にとつても深く関わる問題です。被災前は、住職を中心に詠唱会・お経の会・認知症予防のための脳活性化教室等、少なくとも月に七回、檀家さまたちが寺に集う機会がありました。しかし、被災に伴いそれらの行事も全て一時中止せざるを得なくなっていました。客殿修復後、ようやく詠唱会を再開した矢先、今度は「コロナ禍」で再び休止に。その後再開のめども立たないまま現在に至っています。以前はお寺の集まりに参加していた人たちの行き場がなくなり、コミュニティをとる機会も失ってしまいました。お寺の地域コミュニティに果たす役割の重要性に改めて気付かされました。今後、新本堂建立と共に以前のような地域コミュニティの形成に、微力なりとも協力していければと思っています。

〈被災に何を備える、準備する〉

冒頭に記した通り、この度の被災で電気供給

が一週間止まりました。幸い有縁の方が発電機と蓄電池を借して下さったお陰で、本当に助かりました。一方、水道・ガスは平常通り使用できましたが、もし生活インフラの全てがストップしていたら、と思うとぞっとします。

毎年のように大規模な自然災害が発生している状況下、お寺の「避難所」としての機能が期待されつつあります。その期待に応じるためにも、生活インフラの「備え」は整えておくことが望ましいと思います。具体的には「発電機」「蓄電池」は是非とも備えておきたいものです。後で伝え聞いた話ですが、ある病院では電気が止まりエアコンが使用できず、入院中の患者さん数人が熱中症で亡くなられたとのこと。 「電気の供給が人の命に直結する」という現実を思い知らされました。「発電機」はガソリンで稼働するものが一般的ですが、軽油やプロパンガス、カセットボンベで稼働するものも販売されていますので検討いただければと思います。

また、水はできるだけ多く確保しておくといい

と思います。飲料用の水は勿論、手や体を洗ったり、その他、何事にも水は絶対に必要です。少なくとも、風呂のお湯はすぐに流さずに溜めておくだけでもかなり有効でしょう。

水道が止まった時に最も困るのがトイレだと思います。断水に備えて「抗菌性凝固剤」を使用した「簡易トイレ」も備蓄することをお勧めします。「生活インフラの備え」に加え、「保険」の加入も是非お勧めします。浄蓮寺では檀信徒の皆さまのご理解ご協力のもと、護持会で建物の保険に入っていました。お陰で、想定程度の保険金が入り、本堂再建を決断する大きな後押しとなりました。また、浄土宗の共済にも三口入っていた為、まとまった金額がおりました。一方、堂内のご本尊さま等の仏像や荘厳には保険が掛けられていませんでしたので、今後の課題だと思います。そして、「過去帳」をはじめとする重要書類は、平素から頑丈な場所で保管し、非常時にすぐに持ち出せるように普段から準備しておくといいと思います。同時に、データ化やバックアップ等の

対応をしておく、さらに安心だと思います。

〈阿弥陀さまを心のささえとして〉

台風被災、そして引き続きコロナ禍と、非情なこの世の現実を突きつけられた一年でしたが、そんな中で、私の心の大きな支えとなったのは、他ならぬ阿弥陀さまの存在でした。

もちろん、お念仏を称えるだけで辛さや不安がきれいさっぱり解消される訳ではありません。それどころか、今もこの先のことを思うと不安ばかり、まさに「薄氷を踏む思い」です。しかし、こんな私を見捨てることなく「必ず極楽へ救う。ナムアミダブツと称えよ」と願い、呼びかけて下さる阿弥陀さまの存在は、私にとって何にも代えがたい大きな心の支えになっています。今まで以上に阿弥陀さまの存在を心強く感じています。

被災の経験と合わせ、「ただの一人も見捨て給わぬ」阿弥陀さまの大慈悲のみこころを一人でも多くの方にお伝えすることができるよう、これからも精進してまいりたいと思います。 合掌

『寺院消滅』『教養としての仏教』著者

鶴飼秀徳の

寺々刻々

「第二の廃仏毀釈」
に備える

本堂に置かれた具足



コロナ禍におけるお盆では、全国のお寺で様々な変化が見られた。特に檀家さんの自宅を回って仏壇供養する棚経。なかには「密」を避けるために庭先で読経するケースもあったようだ。

私も棚経では毎年数十軒回る。今年は2割ほど減ったが、コロナ禍が落ち着けば、また元に戻ると期待したい。それよりも切実に感じているのは最近、仏壇が「変化」していることだ。

マンションへの住み替え、あるいはリフォームをきっかけにして仏壇をコンパクトなものに買い替える動きである。新築の場合も仏間をつくらないケースが増えており、仏壇仏具産業は厳しい時代を迎えていると思う。仏壇がなければ、我々僧侶も棚経に行くことはなくなる。

終戦直後までは日本人の仏壇保有率はほぼ100%といわれた。現在では5割を切っているとのデータもある。核家族化などによって家族関係や住空間が変わり、仏壇仏具へのニーズが低下してきているのだ。

いま同業界は過渡期にある。だが、150年前にも仏具業界のピンチはあったのだ。それを鮮やかな事業転換で乗り越えた京都の老舗企業の事例を見ていきたいと思う。



京都屈指の老舗を誇る企業、それが1875（明治8）年創業の島津製作所だ。近年は社員の田中耕一氏がノーベル化学賞を受賞したことで一躍、注目を浴びた精密機器メーカーだ。直近ではコロナウイルスPCR検査キットを先駆けて開発し、話題になった。

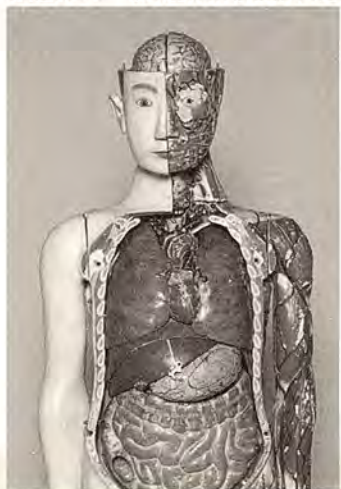
創業者は島津源蔵という人物で、西本願寺に出入りの仏具商に生まれた。当時、京仏具は江戸時代には御所や多数の寺社を取引先に抱え、安定して需要を得ていた。

ところが明治維新時、大きな時代の変化に直面する。新政府は王政復古、祭政一致の国家づくりを目指し、神仏分離令を布告。これまで混じっていた神道と仏教を切り分けよ、ということになった。神仏分離令はその後の寺院の破壊行為「廃仏毀釈」の呼び水となる。

折しも、京都は東京への遷都によって荒廃する。京都では都市再生のための、殖産興業政策の手段として廃仏毀釈が行われた。具体的には、寺から仏具などの金属を供出させ、インフラや武器などに転用させていったのである。実際、当時の四条大橋は仏具が溶かされて建造された。仏具業は、危機的状況に追い込まれ、島津源蔵の店も例外ではなかった。

創業時に手がけた理化学機器

(真空ポンプ=排気器、人体解剖標本、起電機)



一方で、新しい産業の狼煙が次々と上っていく。1870年、化学技術の指導を目的にした舎密局や殖産興業を推進する本部である勸業場などが設立されると、いよいよ京都の近代化が加速する。仏具業界の先行きを案じつつも源蔵はいまこそ、産業構造の転換期にあると嗅覚鋭く察知した。源蔵は舎密局に出入りを始めると、持ち前の探究心を発揮し、理化学の知識と技術を瞬く間に習得していったのである。

鋳物仏具で培われた技術はけっして無駄ではなかった。輸入された教育用機器の修理などに大いに生かされると、理化学機器の製造の受注を請け負うようになっていく。

源蔵の新規事業の追い風になったのが、京都が全国に先駆けて取り組んだ新しい時代の教育計画である。この政策によって京都では1869年に、計64校が一斉に開校している。

さて、学校が生まれれば、様々な実験機器が必要になる。源蔵は仏具製造の鋳物技術を理化学機器の開発に転用させていく。初代源蔵から二代目へと代替りをした頃には、仏具業からは完全撤退。新生島津製作所として本格的に理化学機器事業に参画する。特に蓄電池事業は、

初代島津源蔵



「仏具とノーベル賞
製作所創業伝」(朝日新聞出版
1400円)



うかいしゅうとく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞・雑誌記者を経て2018年にジャーナリストとして独立。「仏教界と社会との接点づくり」をテーマに活動続ける。著書に「仏教抹殺」(文春新書)「ビジネスに活かす教養としての仏教」(PHP研究社)など多数。新刊に「仏具とノーベル賞 京都・島津製作所創業伝」(朝日新聞出版)。東京農業大学・佛教大学非常勤講師、一般社団法人「良いお寺研究会」代表理事。京都教区正覚寺副住職。

時代の趨勢^{すうせい}をとらえた。島津源蔵の頭文字をとって「GS蓄電池」と命名された。現在の自動車用バッテリーの世界シェア3位で知られるGSユアサの源流である。

現在、島津製作所はグループ従業員1万2000人、連結売上高4000億円近い規模にまで発展している。2002年には社員の田中耕一氏がノーベル化学賞を受賞するなど、島津製作所は今では世界的な知名度を得ている。時代の趨勢を敏感に読み取り、「新しい価値」を産みだした島津製作所。仏教界も大いに学ぶところがありそうだ。

私は昨今の寺離れや死生観の変化による葬送の希薄化を「第二の廃仏毀釈」と見ている。背景には、人口減少や核家族化など、社会構造の変化があり、それに仏教界が抗うのは確かに難しい。だが、座しては減じるだけである。

本来、仏教は時代に合った「ソフト(智慧)」を提供してきたはずである。島津源蔵が、仏壇づくりで培った技術力を最先端の製品へとアップデイトしたように、僧侶自身「今、社会で何が求められているのか」を問い直す必要があるのではないだろうか。

浄土宗の青年僧侶に伝えたい

ぶつぶつ 放談

今月のぶつぶつ放談はコロナ禍で
広がるリモート社会の中、すでに
四半世紀にわたり寺院「HP」を
開設している僧侶に、その現状と
お寺に求められる「IT」を伺った。

お寺に必要な「IT」を考える 第1回

◆登壇者◆

今岡達雄

いまおか・たつゆう

1948年千葉県市川市生まれ。千葉・市川・善照寺住職。早稲田大学大学院理工学研究科卒業後、三菱総合研究所勤務。在職中にインターネット調査に携わる。1995年同研究所退職後、善照寺住職専業となり同寺のHP開設。現在、浄土宗総合研究所副所長。

青木照憲

あおき・しょうけん

1948年熊本県熊本市生まれ。東京・目黒・西蓮社住職。日本大学理工学部建築学科卒、建設会社勤務後西蓮社に。1997年同寺のHPを開設。また『浄土』創刊号からのPDF化とそのネット公開に携わる。地域の人向けのパソコン教室などを行っていた。

◆司会◆

服部祐淳

はっとり・ゆうじゅん

(長野・更埴組安養寺副住職)

司会 コロナ禍のなかで各寺院はオンライン法要の配信を試みるなど、いわゆるお寺の「IT化」の波が急に押し寄せています。7、8月は施餓鬼会、お盆など大きな行事を行った寺院も多いと思いますが、お二人は実際どのようにお勤めされましたか？

今岡達雄師（以下今岡） 8月17日にお施餓鬼を勤めましたが、寺院内の3カ所（本堂、檀信徒会館1階、2階）に場所を分け、本堂での法要を同時中継して映像を檀家さんに見ていただくというシステムにしました。

檀家さんは近隣の方が多いので、ご自宅で見えていただくよりはコロナ対策をしたうえで、広く場所をとって集まっていた方がいいかなと。同じ組内のお寺さんはほとんど規模を縮小して行いましたが、自坊ではほぼ例年と変わらない人数で行うことができました。

青木照憲師（以下青木） うちの檀家さんも近隣の方が7、8割。お盆は例年だと13、14、

15日の午前に本堂で法要をしていましたが、今年は三密を避けるために午後もお勤めし、計6回の法要としました。往復はがきで希望日時などを募ってご案内しましたが、やはりコロナを恐れてか参拝者は少なく、塔婆回向のみの申し込みが多かったです。

司会 配信ではなく、寺院に集っていただく形をとられた意図は？

今岡 やはり参加される世代が高齢ということですね。パソコン・スマホの扱い方はあまり得意でない方が多いですから。あと、私も72歳、老僧の部類に入りますが（笑）、オンライン法要やZOOM（ズーム）の会議は年寄りにはとにかく疲れる（笑）。

青木 ははは（笑）、ずっと緊張が続いて集中力が続かないですよ。あと、出席される方はやはり場の雰囲気求めてくる方が多いですね。お寺に行って、お坊さんがお経をあげている、そういう雰囲気を感じて自身が心安らくなる。ああ、ちゃんとご先祖様を

IT（アイティー）その1

画像や動画、音声などをデジタル情報として扱う総称で以下の3つで成り立つ。

- 1) ハードウェア（スマートフォン、パソコンなど）
- 2) ソフトウェア（アプリケーション、OS（オペレーションシステム）など）
- 3) 通信技術（インターネット、WiFi（ワイファイ）など）

ご供養できたのだなって。「お寺側が何をしたい」というより、「お檀家さんに何を持ち帰っていたか」が大切なんじゃないでしょうか。

司会 宗教専門紙では「受け手目線のオンライン化を」という趣旨のコラムが話題になり、ネット上でも賛同の声が上がっています。

今岡 お寺に何が望まれているかを、よくよく考える必要がありますよね。

例えば、日ごろから法要と法話会などに参加していた檀家さんがコロナ禍で聞けない状況になった。これは、ネットで法要と法話を中継する意味がありますよね。しかし寺院側が「今年は集えないので」と、法要を定ポイントでYouTubeに流したところでそれは有効的ではない。誰に向けたものなのでしょう。

僧侶による相談サイト「hasunoha」は、僧侶が仏教の教えを通じ相談に乗ってくれるというところでとても評判がいい。オンライン化したからOKではなく、そういった評判のい

いコンテンツをよく見たうえで、自坊では何ができるかを考える作業がとても重要だと思います。

青木 オンライン法要にこだわらなくても、伝えたいことがあればHPでもいいわけですからね。インフォメーション・テクノロジー（IT）のテクノロジーが飛躍的に発展していく中で寺院側がどう使い分けていくかが重要です。

今後ヴァーチャル技術も発展し、においが伝わる技術も登場するでしょう。その中で、お寺にとって何を重要視するか、また受け手側を考えて配信しなければあまり意味はないわけですから。技術が発展していく中でこういうことができますよと寺院側から周知していく必要がある。

「IT」っていうとこれまでのやり方を大きく変えなければいけないというイメージがあると思うのですが、この部分をこう変えたら効率化を図れる、便利になるという一つの

IT（アイティー）その2

ITの目指すものは効率化。資料整理、情報検索、情報共有など。

効率化は利益優先の資本主義では必要不可欠となり世界中の人々が追い求めている

ツールにすぎません。世の中の流れの中で住職も柔軟になつていかなければいけない。これに対しては宗全体で啓蒙していく必要もあると思います。

今岡 浄土宗のツールはいまだに「FAX ニュース」ですけどね(笑)。

青木 紙のよさもあるのですが、やはり未来を見据えた施策を講じる必要があると思います。

司会 情報発信というツールではホームページ(HP)を開設している寺院も多いと思います。

今岡 例えば葬儀や法事などをネットで受け付けるといったシステムを設けているならば別ですが、「うちの寺はこうです」といった情報提示だけならそれはアクセス数も先細りになりますよ。

青木 昔はHPがあることが一つのステータスだった時代がありました。95年にウインドウズが発売されてネットが一気に家庭にも普

及して。あの頃はまだモデムでしたのでいかにHPの容量を軽くするか、といったことが主流(笑)。いまはメモリーもスピードも上がって、フォーマットもたくさんありますので誰でもHPを開設がしやすくなりました。だからこそ検索される工夫をしないとダメなのです。

寺院の由緒、歴史を伝えるだけでは一方通行で、あまり宣伝効果は得られない状況にあります。例えば自坊では納骨堂の募集も行っていますので、求める方の「場所」「宗派」「価格」などで検索にかかります。その先に寺院の歴史や住職の考えなどを知ることになります。いわば入り口の逆転です。結果的に寺院のこと、浄土宗の教えに触れる機会も増えているということですね。

(次号につづく)

リモートとオンライン

リモートは遠隔の意味。オンラインは電話回線や通信で繋がっていること。リアルタイムで音声と画像の双方向通信ができることで世界中が簡単に繋がる時代となった



微

風

吹

動

琴の弦が張り過ぎたり、緩すぎたりするならば、
琴は良い音を奏できますか？

ブツダには、真面目な修行を行っても悟りに近づけないソーナという弟子がいた。彼は行き過ぎた修行によつて足から血を流すほどであった。ブツダは、ソーナが琴の名手であることを知っていたので、彼に対してこのように諭した。

「もし、あなたの琴の弦が張り過ぎたり、緩すぎたりするならば、琴は良い音を奏できますか？ 奏でませんよね。ソーナよ、修行も同じことです。行き過ぎた修行は心の高ぶりを招き、少なすぎるのは懈怠を招くのです」

このようにブツダに諭され、ソーナはその通りに精進し悟りに至った。

名 和 清 隆

(ブツダの中道を説く「琴の弦の話」)

私は昔から、何となく雲を眺めるのが好きである。

子どもの頃はよく、持て余す時間を食いつぶすように、空に浮かぶ入道雲を眺めては、「魚だ、馬だ、ロボットだ」など、刻々と変わる雲の姿を楽しんでいた。特に小学校低学年までは、雲は「乗れるもの」だと思い込んでおり、雲の上に乗って旅をする空想にしばし浸っていたものだ。(これは「アルプスの少女ハイジ」の影響であったと思う。アニメのオープニングで、ハイジが勢いよく漕いだブランコから雲に飛び乗り、気持ちよさそう寝そべるシーンをご存知だろうか?)

科学的な知識がロマンチックな世界への没入を邪魔するようになっている現在でもなお、竜の巣のような立派な渦巻雲が浮かんでいるのを眺めると、「天空の城ラピュタが奥に潜んでいるかも!?!」と空想で遊んでしまうのである。

ここで、雲に関する基本情報を少しばかり紹介。

雲は、その姿やある高さによって10種類に分けられるのだという。巻雲(すじぐも)、巻積雲(うろこぐも)、巻層雲(うすぐも)、高積雲(ひつじくも)、高層雲(おほろぐも)、乱層雲(あまぐも)、層積雲(うねぐも)、層雲(きりぐも)、積雲(わたぐも)、積乱雲(にゅ

うどうぐも)。「層」と名のつく雲はのっぺりと広がり、「積」がつくものはモコモコして空高くあるのが特徴。雨を降らせるのは、「乱」がつくものが多いとのことだ。さらに姿や内部構造の違いで「種」、個々の雲の並びや透明度によって「変種」と分けられる。常に大気の流れにより形を変え、同じ形のもものは二度と存在しない。

そして、雲は当たり前のように空に浮かんでいるが、雲の正体は水蒸気なので重さがある。重さのある水蒸気であるのに浮かんでいるのは、上昇気流とのバランスゆえ。雲粒は自身の重さで毎秒約1センチ落下しているが、空にはそれを超える上昇気流があるため、雲は浮かんでいるのだ。しかし、雲粒が成長して大きくなると、上昇気流が粒を支えきれず、雨となって降ってくる。

また、雲の色は白と相場が決まっているようだが、実は様々な色を変える。太陽から届く波長の散乱具合によつて、雲は白く、また時には赤く染まり、時には虹色の姿を見せることもある。(そういえば、大学時代にインドのガンジス川で見た、黄金色に染まる雲の風景は、大きな感動を伴い私の人生観を多少なりとも変えた気がしている。)

つまり雲は、本質は不変であるが周りの状況によつて自在にその姿を変え、絶妙なバランスで空に存在する。また降らす雨は恩恵を

与え、美しい色合いは感動を与える。

このように捉えてみると、雲の持つ特徴とは、理想的な人間の在り方そのものに思えてくるのではないか。そして、程よいバランスが大切であるとのブッダの教え、「中道」を体現しているようにも思えるのである。

このコロナ禍の影響で、在宅での仕事が圧倒的に増え、旅行などの外出もしていないせいか、近頃、雲を眺めた記憶がないことに気が付いた。むろん見てはいるのであろうが、眺めてはいないのだ。知らず知らずのうち、生活のあらゆるところで、少しずつではあるが緊張の糸が張っているのかもしれない。

「張りすぎず、緩めすぎず」

このようなご時世だと、ついつい「前向きに頑張らねば」「正しい強い自分であらねば」といった言葉に縛られ、気づかぬうちに心の弦を張りすぎてしまうものだ。

秋になって、空には楽しそうにヒツジ雲が浮かんでいる。

時には意識的に雲を眺め、張っている心の弦を緩めたいと思う。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二〇回

第三部

充実と総りの白秋へ

荒沢栄一との闘いにみちた親交 その九



タゴールに茶道を教授した、 海旭の教え子

さて、お待たせをした。ここからいよいよ
詩聖タゴールの登場である。

渡辺海旭の依頼を快諾した教え子の青柳貫
孝は、ラース・ビハリ・ボースと同じく日本
に政治亡命したインド独立運動の闘士で、英
国大使館の執拗な強迫から自死したアタールの
遺骨を抱いて、遠くインドへ渡ると、まず
遺族にそれを届けた後、本来の目的であるイ
ンド各地の仏跡を経巡りながら茶道の教授と
普及を開始した。そのなかでも、もつとも長
逗留したのが、西ベンガルのボルプールであ
る。同地にタゴールが自身のノーベル賞授賞
金で設立したサンチニケートン大学（後に国
立となり「タゴール国際大学」と通称される
ようになる）に講師として招かれて「茶の湯」
を教授。最初の「教え子」となったのが、同
大学の創立者にして東洋初のノーベル文学賞

受賞者であるタゴールその人だったのである。
さらに青柳がタゴールと海旭のあいだを
しっかりと繋いだ状況証拠がある。

その後青柳はタゴールの元を離れ、小乗仏
教が当時もなお盛んなセイロン（現スリラ
ンカ）やビルマにも渡り、同じく茶道を広め
るが、昭和四年（一九二九）年に帰国、東京
は文京区本郷の潮泉寺の住職を務めている。
これはタゴール最後の来日とびたりと重なっ
ており、この点からも青柳がタゴールと海旭
の間を取りもつたことは明らかだと思われる。
すなわち、タゴールは、心情的に支援をし
ているインド独立運動の闘士ラース・ビハリ・
ボースが亡命先の日本でいかに海旭の世話に
なっているかを、渡印した海旭を師と仰ぐ教
え子の青柳貫孝から聞かされ、海旭に強い関
心と感銘をおぼえたことは、まず間違いない
まい。そして、タゴールが次の来日のおりに
は、パトロンであり日本の実業界の巨星でも
ある渋沢栄一との懇親の席に海旭とボースを

同席させ、三者の関係をより睦まじくさせた
いと思つたとしても、なんの不思議もない。

最後の来日となつた昭和四（一九二九）年、
海旭とボースが、ごく限られた洪沢の側近の
一人としてタゴールの歌舞伎座鑑賞に随伴し
ていることが、その隠れもなき証拠であらう。
では、タゴールが三者の仲をとりもつたこと
で、三者——とりわけ洪沢と海旭の間にどの
ような交歓があつたのだろうか？ 残念なが
ら、これについては史料がまったく残されて
いない。そこで、むしろそれを奇貨として、
ここからは妄想の翼を大いに広げてみたい。
ちなみに、彼らの間では、こんなやりとり
が交わされたのではないだろうか。

富豪が恐れる 洪沢の泥棒袋

最初に口火を切つたのはボースであつた。
「昨年は同志のアタールの十周忌でしたが、
渡辺先生に法事の相談にいったところ、費用
は全額もつから心配するなとおっしゃられ、

追善の会を盛大に催すことができました」

「月日が経つのははやい」とタゴールがボースの後を引き取つた。「十年前、わがインドの志士の遺骨を故国までお届けいただいたことに改めてお礼を申しあげると共に、今般の追善供養へのご尽力、まことにありがたい」「お世話になつてゐるのはインド人だけではありません」と今度はボースが引き継いだ。「ビルマ人やセイロン人も面倒をみてもらつていて、先生の西光寺はインターナショナル・テンブルと呼ばれています」

海旭は首をふつて恐縮した。「ほ、坊主としてやるべきことをやつていただけです」

「私も渡辺海旭褒めの仲間に加えてもらおうか」洪沢が笑みをうかべながら割つて入つた。「ボース君と違つてちよいと辛口だがね。初めて顔を合わせたのは、仏教護国団の来賓に呼ばれたときだったか、それとも国士館大学の設立発起人話のときだったか。それ以前まではずいぶんと威勢のいいお坊さんがいるもん

だと思っておった。なにしろ、主筆をつとめる宗門の機関紙でこう指弾されたのだ。富豪がなすべきは慈善団体の顧問に名を連ねることではない、と。これは日赤の理事をしている私のことかと、胸にずきりと突き刺さった。「あ、あの節は、若気のいたりで大変ご無礼をいたしました」海旭は短髪の頭を深々と下げた。「青淵先生が実行の人であることを知らぬ浅薄なる妄言に、ただ恥じ入るばかりです」「青淵」とは生誕地が青い淵であったことに因んだ洪沢の号である。

タゴールが会話に加わった。「二回目の来日のときだったか、シブサワが院長をつとめる救貧施設に案内された。孤児やライを患って家族や社会から見捨てられた年寄りたちを大勢世話していて、わがインドでは野放し状態なのに、これは凄いいことだと感動したものだ」タゴールが例にあげたのは東京市養育院のことである。「働けない人を税金で面倒をみると怠け者をつくり社会の負担になるだけ」

という議会の反対に対して、洪沢は、「政治は論語でいう仁に基いて行なうのは当然である」と公（おおやけ）による救貧を主張、その運営に関わり、終生院長を務めたのである。「だが、やはり公だけでは限界がある」と洪沢は言う。海旭をみつめた。「渡辺君からは、こうも言われた。『富豪たちが今なすべきは、一片の愛蔵品を売却して、無料浴場を建て、一夕の食事の炊き出しをすることではなからうか』と。これは公（おおやけ）にすべてをゆだねるのではなく、私（わたくし）も頑張れという叱咤だと受け止め、渡辺君の浄土宗労働共済会にも学びながら、いまでも仲間の富豪たちにも働きかけをつづけておる」そこで、洪沢は一息入れると、足元に置かれた、大ぶりの蝦蟇口（がまぐち）タイプの革製バッグを指さした。「これに大いに活躍してもらってな」海旭は身を乗り出して言った。「ほう、こ、これが世の富豪たちを恐れさせている、あの『洪沢の泥棒袋』ですか」

ボースもタゴールも思わず見入った。

洪沢は第一国立銀行（現在のみずほ銀行）、王子製紙や東京瓦斯など今も日本経済の屋台骨を支える会社を生涯で五百以上も立ち上げ、後に「日本の資本主義の父」と呼ばれることとなるが、古稀を迎えて第一線から退いてからは残りの人生を社会事業に傾注。寄付を募ってまわるときは、「寸志」で体よく逃げられないよう特大の鞆を持参、そのため三井、三菱などの財閥系をはじめ実業界の要路からは、洪沢の泥棒袋として大いに恐れられたという逸話はつとに知られていた。

洪沢は「泥棒袋」を抱え上げると、破顔一笑して、こう続けた。

「私の持論である『論語と算盤』、つまり『正しい道理と一致せしめるように致さぬと富を完全なる富たらしむることはむずかしい』という理屈を理解してもらったことだがね」

仏つくって魂いれずの救護法

洪沢はにわかに表情をくもらせて言った。

「ところで、最近、懸念していることがある。ひよっとしたら、公、私、も、社会の困窮の進展にもうついていけんのじゃないか。これについて、渡辺君はどう感じておるかね」海旭は深く頷いた。

「ま、まったく同感です。私がドイツ留学から帰国して翌年に深川ではじめた浄土宗労働共済会は、当初から利用者が年に三、四万人はいたのですが、十年前の世界大戦の好景気で、十分の一に減りまして。坊主と医者が暇なのと同じで、これは大いに結構なことだと思っただのも束の間、ここ二年ほどで急増していて、今や入所を断わらねばならぬ状況です」

日本は、大正三（一九一四）年にはじまった第一次世界大戦で、日英同盟を理由に三国協商側についたものの、実際の戦闘にはほとんど参加しない「漁夫の利」によって「戦争

特需」の恩恵を独り占めにし、未曾有の景氣にわきたった。しかし、大戦後数年でヨーロッパ列強が復興するや、日本はその反動で輸出が伸び悩み「戦後恐慌」へ、そこへ大正十二（一九二三）の関東大震災が追い打ちをかけ、さらに震災手形の処理をめぐって金融恐慌が発生、その矛盾は農村を直撃して娘の身売りを常態化させ、食い詰めた農民の流入で都市部に極貧層の急増をもたらしていたのである。海旭は大きく頷いた。「こ、ここは公の出番です。青淵先生もいろいろ動かれて、この四月に救護法が成立しましたが……」

救護法とは現在の生活保護法の前身である。それまで日本における救貧関連法は明治七（一八七四）年に制定された「恤救規則」しかなかった。それは善意の第三者か近親者による「相互扶助」を基本におくもので、公に扶助の責任と義務はない。それがようやく盛り込まれたという点では、「この国には一条の救貧法すらない」と訴えてきた海旭から

すると、遅きに失したとはいえ前進であった。「しかし——」と洪沢は表情をさらに暗くした。「仏つくくって魂いれず」の由々しき事態だと私は危惧している。「それが海の外からか国内からかはわからんが、ここにどめの一撃」がきたら日本は大変なことになる。そして、そのとき最も底辺にある人々を救えないとこの国はとんでもないことになる」

なんとも不吉な予言だった。しかし、突然、タゴールが話題を切り替えた。

「ところで、みなでみるカブキだが、どういう演目なのかを解説してもらえないだろうか」

ボースも異国の伝統芸能の鑑賞の予習に同調した。「私もぜひうかがいたい」

これで海旭は洪沢に「とどめの一撃」の内容と可能性について問いただす機会を逸し、これが渡辺海旭と洪沢栄一の対面の最後となったのである。（つづく）

江戸の川 を歩く

第四十回

江戸ウォーカー

森清鑑

霞ヶ浦 (2)

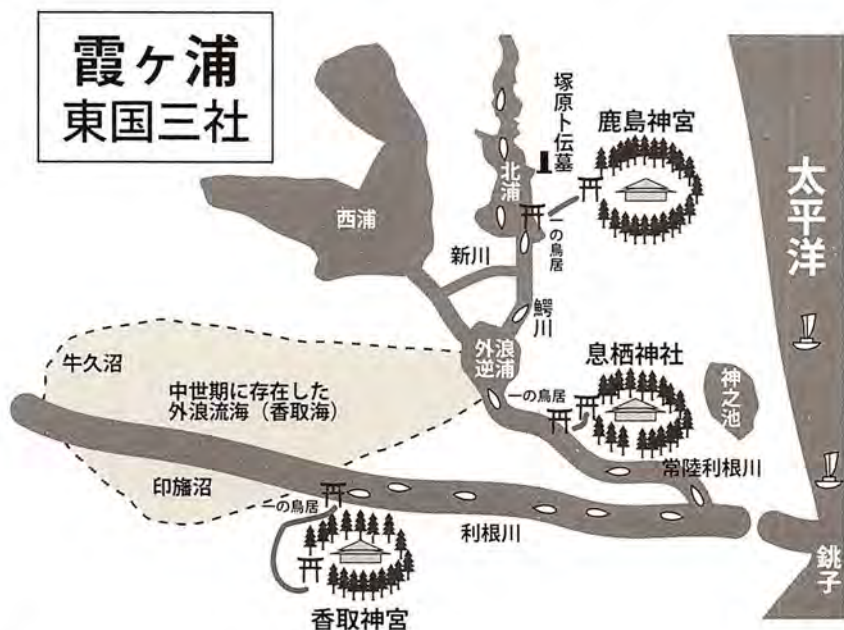
北浦

霞ヶ浦の一つ、北浦は西浦の東に並び縦に伸びている、太平洋沿いに縦に細長い湖。空から見ると細長いぎざぎざ模様の形状。北浦も西浦と同様、江戸期から豊富な漁場として知れ渡っていた。

外浪逆浦から鰐川を舟で北上する。左を見ると潮来の家並み。過ぎると行方へ。右一帯は鹿島で、その先は太平洋である。鰐川は広がり、北浦に入る。右を見ると有名な鹿島神宮の鳥居が聳えている。

西浦（霞ヶ浦）と同様にあちこちで漁師が活躍している。漁獲量は豊富。ワカサギ、白魚、エビ、シジミ。起伏に富む美しい湖である。どんどん北へ向かうと銚田。湖の北先端に、銚田川や巴川が流れ込んでいる。他にも数本の川が流れ込む。満潮になれば太平洋の潮が入る汽水湖である。

北浦湖から陸地をどんどん北上すると、水戸近くに涸沼がある。水戸藩はこの間に水路を設ける



掘削工事に着手したが、この工事は頓挫してしま
う。完成していたら水戸那珂湊から涸沼、北浦、
利根川経由で江戸までの内陸水運が実現していた
はずである。

東国三社

江戸の方に戻ろう。しばらくすると、左に鹿島
神宮の鳥居が見えてくる。鰐川を下って外浪逆浦
湖に出る。やや丸みを帯びたこの湖を渡り常陸利
根川を下る。すると、左に息栖神社の鳥居が見え
てくる。神秘的な美しい光景。常陸利根川は銚子
の前で利根川本流に合流する。これが江戸時代の
船運路である。しかし、それ以前の中世では、銚
子から幅広い川状の海が広がり、外浪逆浦湖から
外浪流海となり牛久まで続き、南は印旛沼まで飲
み込む細長い海であった。すなわち、今の霞ヶ浦
(西浦、北浦、外浪逆浦)とほぼ同じ大きさの海
が東西に伸びていたのである。これらを含めた海
の入り口に、鹿島神宮、息栖神社、香取神宮の、
いわゆる東国三社が配置されていた。そして、こ

の三社は、有史以前から信仰の対象であり、今で
は想像できないほど朝廷の厚遇を受けていたので
ある。

これも霞ヶ浦、外浪流海のまさに海の都と圧倒
的な神秘の自然がもたらしたものであろう。現代
でも関東屈指のパワースポットとして三社巡りバ
スツアーなどが盛んに行われている。では、江戸
時代に戻って三社巡りを楽しもう。

香取神宮

銚子から上流に向かって舟を進める。左手、川
沿いに鳥居が建っている。これが津宮鳥居河岸。
江戸時代の香取神宮の表参道口。常夜灯があり、
常に大勢の参拝客があった。舟を下り、鳥居を潜っ
て神道山古墳の森をぐるりと巻いた広大な香取神
宮の境内に出る。香取神宮赤鳥居を潜り、森の中
を進むとやがて大きな石の鳥居。左を見ると佐原
から来るもう一本の参道。ここで合流。鳥居を潜
ると幅広の石段。その上に同じく横に広がる豪壮
な朱門の香取神宮総門がある。そして香取神宮の

豪華な本殿がでんと聳える。香取神宮は亀甲山の頂きにあり、辺り一帯は広大な神域の森。江戸以前ならば、ここから北眼下を見下ろすと、西へと大きな湖（外浪流海）が広がっていたはずである。

祭神は、大国主の国譲りの際に活躍する経津主神。古くは朝廷から蝦夷に対する平定神として、藤原氏からの崇拜も受け、歴代の武家政権からは武神として崇拜されてきた。現在でも、元旦の早朝に天皇が四方拝（年災消滅、五穀豊穰を祈願して四方を拝す儀式）で遙拝する格式の高い一社である。関東を中心として日本全国にある香取神社の総社。

創建は神武天皇十八年。『常陸国風土記（八世紀初頭）』にはすでに明確に記述されている古社。源頼朝、足利尊氏も寄進し、家康は一五九一年朱印地として一千石を与えている。その後、幕府は慶長十二年に大造営を施し、さらに將軍綱吉の元禄十三年には現在の本殿、楼門を建造している。

武神を象徴するかのように、参道沿いに天真正伝神道流（香取神道流）の開祖、飯篠長威斎の立

派な墓がある。彼は室町時代、香取神宮境内で剣法の奥義を極め、香取神道流を生み出す。これは最古の剣法ともいわれ、ここから中条流、影久流、鹿島神道流などが誕生していく。鹿島神宮の塚原ト伝も香取神道流から入っているのである。

息栖神社

さて今度は息栖神社である。香取神社の参拝を終えた江戸っ子は、再び津宮鳥居河岸に戻り、舟に乗り銚子方向に下る。左を見ると、常陸利根川が流入している。舟を転回させてこの川に乗り入れると、潮の香漂う潮流の感。前方遠くに外浪逆浦湖が見えてくると右手に大きな鳥居。満潮時には潮に立つこの鳥居が、息栖神社の一の鳥居である。鳥居に一礼し上陸。長い参道を行くと瀟洒な社がある。息栖神社の祭神は久那戸神。創建は第十五代応神天皇の頃というのだから恐れ入る。

一の鳥居の両脇に二つの四角い井戸がある。「忍潮井」の井戸。水底に二つの瓶、男瓶と女瓶。千年以上の間、清水を湧出している。男女が双方の

水を飲むと縁結びが成立するというわけで江戸っ子は競ってこの清水を飲んだ。広重の「六十余州名所図会」を見ると、満潮なのであろう、この鳥居は水の中に立っている。鳥居の位置は常陸利根川のはずであるが、まるで海の潮が押し寄せているかのように描かれている。その神秘的な美しさは格別だ。また、息栖河岸は江戸水運の要所でもあった。

神の池

息栖の社を抜けそのまま東へ行くと、太平洋に出る前に奈良時代から有名な、「神の池」（淡水）がある。

この池は周囲の田畑に灌漑用水を提供し、コイ、フナ、ウナギ、エビなどの豊かな漁場でもあった。しかも、その景観は奈良時代の「常陸国風土記」に紹介されているほど。昭和四十四年からの鹿島港建設のため埋め立てが進み小さくなってしまったが、昔は今の七倍も広く、ここを訪れた江戸っ子は、海かと見間違ったに相違ない。

鹿島神宮

息栖神社一の鳥居を右に見て北に舟を進める。外浪逆浦湖に入り右岸沿いに舟を走らせ鮫川に入る。川幅は北に急激に広がり北浦湖へ。右手に鹿島神宮西の一之鳥居が見える。鳥居は厳島神社のように水の上に立っている。潜って舟溜まりの河岸から上陸。参道は東南にまっすぐ伸びている。ややあつて左手に緑の丘。ここに鹿島城があった。一五九一年佐竹氏によって落城するまでの約四百年間、辺り一帯を治める鹿島氏の居城だった。過ぎると、まもなく鹿島神宮の大鳥居（二の鳥居）が見えてくる。ここから広大、神秘的な鹿島神宮の森に入る。古木が鬱そうと立ち並ぶ参道。豪壮な朱の楼門が聳えている。潜ると、右手に格調高くも豪壮な拝殿、本殿が建ち並ぶ。左手には祈禱殿、武徳殿。参道の突き当たりに奥宮があるが、これは家康が寄進したもの。本殿は御神木に囲まれている。

鹿島神宮は全国にある鹿島神社の総本社で、宮



広重「六十余州名所図会」：鹿島大神宮一の鳥居。北浦湖入り口の広々とした海のような光景。水に立つ鳥居。河岸に浮かぶ多数の舟。参道はまっすぐ大神宮に向かっている。茅葺きの家並みが立ち並ぶ。海と山の神秘の自然美。

中で天皇が四方拝で遙拝される一社。北浦湖と鹿島灘に挟まれた鹿島台地に鎮座する東北随一の古社。創建は神武天皇元年。祭神はタケミカズチ神で最も古い神社である。

タケミカズチ神。天智天皇は造営しているし、大化の改新以後、朝廷の東国経営強化の精神的拠点と化す。中臣氏が大きく関与。神職に中臣姓が多いのも頷ける。以後、歴代の為政者は鹿島神宮に帰依している。家康は嘗ての本殿（今、奥殿）を造営し、秀忠は、社殿一式を造り替え、徳川頼房は一六三四年に楼門を造っている。鹿島神宮は、時には、伊勢神宮並の社格で遇された。

塚原ト伝

戦国時代の剣聖、塚原ト伝は、一四八九年、鹿島神宮の神官にして鹿島氏の家老の次男坊として生まれている。父祖伝来の鹿島古流から始め、天真正伝香取神道流（香取神道流）を学び、鹿島新当流の開祖となる。鹿島神宮の境内にこもり、奥義「一之太刀」を編み出す。真剣勝負十九度、戦に出ること三十七度、木刀試

合数百度、しかも無傷であった。剣聖。將軍足利義輝、武田の軍師、山本勘助も指導している。

戦国時代に「剣は人を殺める道具にあらず、人を活かす道なり」活人剣を説いた希有の存在。

ト伝の墓は鹿島神宮の北、北浦湖沿いにある。美しい田圃の丘沿いに、「剣聖塚原ト伝の墓」石碑が立つ。丘に登る細い参道。瀟洒な社に囲まれた自然石の墓石。背景は鬱蒼、神秘的な竹林で覆われている。



さっちゃんね

174

がい目

かまちのよろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)



編集後記

前号スタートの「ぶつぶつ放談」。今号からのテーマはIT。前半はベテランIT老僧、後半は現役IT青年僧に登場いただく。東京や大都市圏を中心として施餓鬼や盆法要をオンライン中継している寺が少なくない。オンライン法要は三密対策のひとつだが、ウィズコロナの布石にもなる。企業ではコロナ発生から半年経ち、遠隔会議はもはや日常化し定着している。さて、人々の心と触れ合うべき僧侶や寺にはどんなITが求められるか。

巻頭カラーのインド紀行筆者、佐藤良純師はインド渡航歴40回超え。若かりし頃にはデリー大学へ長期留学。学者として釈尊の著書は数多い。その釈尊を生ん

だのはインドの風土であり、食べ物であり、思想や社会制度だ。そう、釈尊の説いた仏教はインドが生み育てた。しばらくはコロナ禍でインドの地を踏むことはできそうもない。わずかな誌面だが、写真と洒落な文で「インドと釈尊」を感じて貰えれば幸いである。

太平洋を臨む島国日本は台風や津波、そして地震と被災条件が備わる、まさに天災大国。それだけに数えきれない被災を乗り越えてきている。巻頭は被災から一年を迎えた千葉県鋸南町の浄蓮寺副住職にご寄稿いただいた。地域一帯が被災することですらどうなるのか。何を備えてどう心構えるのか。

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤久雄(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 河本悠大(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・実鈍寺)
 成田昌憲(世田谷・大吉祥寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多将敬(両国・回向院)
 松澤泰彦(芝・寶松院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略、五十音順)

ホームページ jodo.ne.jp/

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

長期連載中の「小説 快僧渡辺海旭」と「江戸を歩くシリーズ」が年内で完結する。前田氏、森氏には新たな企画を進めていただいている。愛読されている皆様、心配無用です。(村田)

編集部長
 編集部員

村田洋一
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 平井泰代子
 本原亮道

浄土

八十六巻 十月号 頒価六百円
 年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
 印刷 令和二年九月二十日

発行 令和二年十月一日

佐藤良純
 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 映印刷

〒105-0011
 東京都港区芝公園四丁目四番地

発行所 法然上人讃仰会

電話 03-5786-9417
 FAX 03-5786-7026
 振替 00180-818-287

写仏、写経、写詠歌のご案内

- 1 A4版の奉書の手本に筆ペンで直接なぞります。
- 2 写仏の仏画は仏師（前田昌宏師）のオリジナル。
- 3 写経は浄土宗日常勤行式です。
- 4 写詠歌は法然上人四季の和歌と宗歌「月かけ」他。



申し込み日 年 月 日

お名前 個人

寺院 教区 組 寺・院 寺院番号

お電話

ご住所 〒

写仏(6枚1組入り) 頒価:2,000円 セット

※ 3組 5,000円、10組18,000円他割引きあります。

写経(12枚5組入り) 頒価:6,000円 セット

※寺院名 () 入れる(無料) 寺院名 () 入れない

※三奉請(関東)と四奉請(関西)をお選び下さい。() 三奉請 () 四奉請

写詠歌(5枚10組入り) 頒価:5,000円 セット

※送料、消費税は頒価に含みます。同封の請求書でお支払い下さい。

※お届けまで2週間ほどかかります。

※ 写仏と写詠歌は1組からでも注文できます。詳細はお問い合わせ下さい。

《お申し込みは本頁をコピー、ご記入の上、当会へご注文下さい》

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947

疫病退散を願う

仏さまを 写しましょう

当会オリジナルの「写シリーズ」に
写仏が新登場。ゆっくりした時間のなか、
ご自宅で仏さまや法然上人のお姿
をなぞって心を通わせましょう。



【写仏】6枚1セット

阿弥陀如来

観音菩薩

勢至菩薩

薬師如来

地藏菩薩

法然上人

※
お申し込みは
裏面へ

法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階
お問い合わせは FAX またはメールでお願い致します。

FAX : 03 3578 7036 Mail : hounen@jodo.ne.jp

TEL : 03 3578 6947